

「ネオ・シカゴ学派」の都市社会学 - シカゴ学派とハーバード構造主義の交差 -

東京都立大学 松本康

1970年代から80年代にかけて展開されたC.S.フィッシャーの「アーバニズムの下位文化理論」は、今日「ネオ・シカゴ学派」都市社会学として認知されるにいたり、とくに日本の都市社会学に強い影響を及ぼしている。本稿では、ネオ・シカゴ学派が、伝統的な「シカゴ学派」と新興の「ハーバード構造主義」との交差によって生じたものであることを主張する。

まず、ネオ・シカゴ学派を、シカゴ学派以降の都市社会学の流れのなかに位置づけ、次いで、とくにフィッシャーの下位文化理論に焦点を絞って、その理論的特徴と経験的検証の方法について確認する。そのうえで、この理論がなぜ「ネオ・シカゴ」学派と呼びうるのかを、シカゴ学派との連続性と差異の両面から明らかにする。

なぜ「シカゴ」か---それは、下位文化理論が都市効果理論として構想されているからであり、とりわけパークの「道徳地域」に関する問題意識と触れ合うものであるからである。なぜ「ネオ」か---それは、下位文化理論が、ワース理論と違って、生態学的決定理論を回避しているからであり、解体理論に代えて連帯理論を採用し、さらに検証に当たってネットワーク分析を援用しているからである。この点を凝視するなら、下位文化理論は「ハーバード構造主義」の連帯理論・ネットワーク分析に支えられていることが了解される。ハーバード構造主義とは、ハーバード大学のハリソン・ホワイトとその学生たちによって生み出されたパラダイムであり、社会構造を諸関係の構造として捉え、これとの関連において人々の行動を説明しようとする理論的・方法論的立場である。属性か関係かという問題を提起した「ハーバード構造主義」の理念型に照らしてみると、フィッシャーの理論は、構造そのものの生成・分化に注目する点において、また構造的分化に下位文化を対応させる点において、独特の位置を占めていることがわかる。ここから、フィッシャー以降の「ネオ・シカゴ学派」の展開をめぐる主要な論点が浮かび上がってくる。

日本の都市社会学における下位文化理論の受容は、フィッシャー以降の「ネオ・シカゴ学派」の展開を代表するものであるが、それは主として、ネットワーク分析の水準でなされている。そのため、2つの問題が先鋭化しつつある。第一に、ネットワーク分析から下位文化への橋渡しをどうするかという問題である。これは、シカゴ的伝統とハーバード構造主義との接点に関する問題である。第二に、下位文化理論と社会構成理論との接合が、ネットワーク分析における属性か関係かという問題と抵触するという点である。これは、ハーバード構造主義と従来の社会構成論的アプローチとの関係に関する問題である。どちらも、ハーバード構造主義の真価が問われる問題である。したがって、日本における都市社会学の研究は、「シカゴ学派の伝統」を標榜しながら、その実、ハーバード構造主義の受容をめぐる問題を扱っていることになる。これらの問題への解答は、理論的洞察によってではなく、経験的研究のなかで与えられるであろう。なぜなら、都市社会学にとっては、経験的研究こそが理論的实践であるからだ。